



ハーゲン・クアルテット (2025.11.13) © 大窪道治

2026/2027 SEASON

世界最高峰と紡ぐ至高のシーズン

四半世紀の矜持とともに、感性の深淵へ

Artist Interview

本堂竣哉 (ピアノ) ×
ベーゼンドルファー Model 250
人生の中心にある《ゴルトベルク変奏曲》

[Schedule 2026.7 ~ 12]

[Information]

[世界最終公演] ハーゲン・クアルテット — 音楽は受け継がれ、歴史が編まれる

ランチタイムコンサート Vol.141 稲積陽菜 (ピアノ)

ゼフィルス・ピアノ五重奏団 第7回定期演奏会 ~静と烈~

2026 / 2027 SEASON



世界最高峰と紡ぐ至高のシーズン 四半世紀の矜持とともに、感性の深淵へ

ベートーヴェン没後200年の序奏と変奏

新シーズンの先陣を切る10月のオープニングコンサートは、ベートーヴェンの後世への影響を読み解く通好みのひととき。ベートーヴェンから多大な影響を受けたとされる二人の作曲家、ブラームスとシューベルトの孤高の世界を描くべく、名手ウィリアム・ヨン (pf) と、TOPPANホールゆかりの笹沼樹 (vc)、毛利文香 (vn) が、瑞々しく深遠なる初共演で伝説の一夜を予感させます。また、ベートーヴェン・イヤーとなる2027年の幕開けは、毎冬ディープな内容で熱い支持を集めるニューイヤーコンサート (1月)。TOPPANホールに貸与されている1909年製ベゼンドルファー Model250とスタインウェイの2台のピアノを駆使し、中野りな (vn)、谷昂登 (pf)、北村明日人 (pf) ら選りすぐりの若手奏者を迎え、ベートーヴェンの初期・中期の世界に迫る聴きごたえあふれるオール・ベートーヴェン・プログラムをお届けします。どうぞお聴き逃しなく!

TOPPANホールが数年をかけて丁寧に対話を重ね見守ってきた若手音楽家の集大成と言えるのが、笹沼樹 (vc) と兼重稔宏 (pf) によるベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲演奏会 (5月)。チェロをソロ楽器として確立させたベートーヴェンの功績を、初期から晩年までの変遷とともに一挙に俯瞰する至高の体験をお届けします。そしてこのシーズン最大のハイライトとなるのが、バルチャ・ワルテットによるベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会 (7月、全6公演)。現在カルテット界の頂点に立つ彼らが、TOPPANホールの抜群の音響空間で挑む全6公演は、一夜たりとも聴き逃さない歴史的瞬間となるでしょう。

至高の対話 — 盟友たちの現在地

卓越した実力を持つアーティストが、信頼するパートナーとタッグを組

むとなればまさに鬼に金棒。その阿吽の呼吸からしか生まれえない、至高の瞬間の数々をお届けします。今まで幾多の名演を刻んできたルノー・カプソン (vn) が、ホール初登場となるギヨーム・ベロン (pf) を相棒に、ブラームスの《ヴァイオリン・ソナタ》全曲に挑みます (10月)。円熟期を迎えたカプソンが描く、ゴージャスで濃密な世界は必聴です。毎回チケットが即完売、客席を熱狂の渦に巻き込み続けているパトリツィア・コパチンスカヤ (vn) が、今回は盟友ソル・ガベッタ (vc) を伴い登場 (10月)。絶対的な信頼関係から生まれる魂が躍動する究極のデュオに、今から会場の熱気が目に浮かぶようです。

さらに、いまや定番企画となった《歌曲の森》シリーズを牽引してきたイアン・ポストリッジ (Ten) がジュリアス・ドレイク (pf) とともに帰還 (1月)。ホールとの長年の信頼関係から生まれた肝煎りの特別プログラムで、ゲーテとリュッケルトの詩を軸に、ヴォルフやシューベルトらの劇的表現の極致を2夜にわたり丁寧に描き出します。

世界最高峰が紡ぐ、音楽の極致

昨年の開館25周年を記念した室内楽フェスティバル (全5夜) でその堂々たる風格と実力を見せつけたフォーレ四重奏団は2シーズン連続の登場。今回は第1夜にドヴォルジャークとブラームス、第2夜は熱狂的な要望に応えシューマンの四重奏曲と、趣を変えた内容を披露します。ますます進化する彼らの躍動に今から心が躍るようです。また、言わずと知れたチェロ界の巨匠ピーター・ウィスベルウエイ (vc) は、昨今活躍がましい北村朋幹 (pf) とのデュオで、ホールとの侃々諤々の議論の末に構築した渾身のプログラムに挑みます (3月)。音楽を多面的に掘り下げこだわり抜く北村とともに、一期一会に散る鮮烈な火花から目が離せません。

藤田真央 (pf) とのデュオで圧倒的な存在感とその音圧で聴衆を圧倒さ

開館から四半世紀の節目を越えてなお、挑戦を続けるTOPPANホール。不安定な世界情勢やAIの台頭など急速な変化に心が翻弄されがちな今だからこそ、音楽が内包する普遍的な力と人間の感受性を信じ、芸術の灯を力強く掲げ続けます。2026/2027シーズンはベートーヴェン没後200年を核に、弦楽四重奏曲やチェロ・ソナタの全曲演奏をはじめ、世界最高峰の精鋭から日本の若手実力派まで、ホールのこだわりが息づく熱量の高いラインナップをお届けいたします。

せた、現代最高峰の知性派ピアニストキリル・ゲルシュタイン (pf) が、待望のリサイタルを敢行 (6月)。メンデルスゾーンやシューマンなど、互いに深いロマン派の絆で結ばれた重厚な人間模様を、ホールの隅々にまでダイナミックに響かせます。

深化する若き才能たち

TOPPANホールから世界へと羽ばたいた数々の才能に引き続き成長の機会を提供し、音楽家としての歩みを確かなものにするのも私たちの大切なミッション。今や文字通り世界を舞台に活躍中の上野通明 (vc) が、ドイツで親交を深めたレミ・ジュニエ (pf) を伴って帰還します (1月)。ご遺族の特別な許可を得て武満徹の《エア》(フルート独奏曲) をチェロで演奏するという大注目のステージ。二人の緻密な目線と深化した音色が交錯する空間に、どうぞご期待ください。昨年度の芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞したカルテット・インテグラは、バルトークを軸に、ショスタコーヴィチ、ストラヴィンスキー、そしてエトヴェシュへの挑戦を交えたスリリングなプログラムで、とどまるところを知らない成熟の足跡を披露します (8月)。

11月には権威あるブゾーニ国際ピアノコンクールの予選会を共催。TOPPANホールのお客さまの音楽への真摯な姿勢を期待され実現した企画で、12名の若き才能が火花を散らします。客席の一票が未来の巨匠を生む刺激的な2日間の詳細は、続報をお待ちください。

来たる新シーズンも、易きに流れず挑戦の手を緩めないTOPPANホールの旅路は続きます。生身の人間同士にしか生み出せない感性のぶつかり合いとその瞬間をともに分かち合う喜びを、みなさまとご一緒できることを心より楽しみにしております。

公演ラインナップ一覧

2026年

10/1 (木) 19:00
TOPPANホール26周年
2026/27シーズン オープニングコンサート
ウィリアム・ヨン(ピアノ) / 毛利文香(ヴァイオリン) / 笹沼 樹(チェロ)
ブラームス: チェロ・ソナタ第1番 ホ短調 Op.38
シューベルト: ピアノ・ソナタ第20番 イ長調 D959
シューベルト: ピアノ三重奏曲第2番 変ホ長調 D929

10/5 (月) 19:00
ルノー・カプソン(ヴァイオリン) & ギヨーム・ベロン(ピアノ)
ブラームス《ヴァイオリン・ソナタ》全曲
ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 Op.78(雨の歌)
第2番 イ長調 Op.100
第3番 二短調 Op.108

10/26 (月) 19:00 7/22発売
パトリツィア・コパチンスカヤ(ヴァイオリン) & ソル・ガベッタ(チェロ)
ルクレール: タンブーラン 八長調(ヴァイオリン・ソナタ Op.5-10、第4楽章)
ヴィトマン: ヴァイオリンとチェロのための24の二重奏曲第2集より
第8曲(バイエルン風ワルツ) / 第11曲(英国風小トッカータ)(2008)
J.S.バッハ: 平均律クラヴィーア曲集第1巻 第15番 ト長調 BWV860より 前奏曲
フランシスコ・コイ: リゾマ(2017)
ラヴェル: ヴァイオリンとチェロのためのソナタ
J.S.バッハ: 2声のインヴェンション BWV772-786より抜粋
パトコップ: Ghiribizzi(2020/21)
リゲティ: ヒルディング・ルーゼンベリへのオマーージュ(1982)
クセナキス: ヴァイオリンとチェロのためのディプリ・ジニア(1951)
C.P.E.バッハ: 鍵盤楽器のためのプレスト 八短調 Wq114-3
コダーイ: ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 Op.7

Glocal Piano Festival at TOPPANホール
第66回 プゾーニ国際ピアノコンクール 予選会
11/16 (月)、11/17 (火) 各日18:30
共催: フェルッチョ・プゾーニ・グスタフ・マーラー財団

フォーレ四重奏団 9/2発売

12/8 (火) 19:00 第1夜
ドヴォルジャーク: ピアノ四重奏曲第1番 二長調 Op.23
スラヴ舞曲集第2集 Op.72より 第2曲 ホ短調 / 第7曲 八長調
8つのユモレスク Op.101より 第7曲 変ト長調
ドヴォルジャーク(クライスラー/フォーレ四重奏団編): わが母の教え給いし歌
ブラームス: ピアノ四重奏曲第2番 イ長調 Op.26

12/9 (水) 19:00 第2夜
シューベルト: アダージョとロンド・コンチェルタンテ へ長調 D487
シューマン: ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.47
ブラームス: ピアノ四重奏曲第1番 ト短調 Op.25

2027年

1/8 (金) 19:00 9/16発売
TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2027
中野りな(ヴァイオリン) / 谷 昂登、北村明日人(ピアノ) ほか
オール・ベートーヴェン・プログラム

1/18 (月) 19:00 9/16発売
上野通明(チェロ) & レミ・ジュニエ(ピアノ)
ラヴェル: 高雅で感傷的なワルツ[ピアノ・ソロ]
武満 徹: エア[チェロ・ソロ]
ドビュッシー: チェロ・ソナタ
ナディア・ブーランジェ: 3つの小品
フランク: ヴァイオリン・ソナタ イ長調

《歌曲の森》～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第31篇&第32篇 9/30発売
イアン・ボストリッジ(テノール) & ジュリアス・ドレイク(ピアノ)

1/20 (水) 19:00 第1夜—ゲーテ・アーベント
ヴォルフ: 《竖琴弾きの歌》/人間の限界/プロメテウス/ガニュメデス/
ねずみをとる男/さすらいの夜の歌
シューベルト: 月に寄す D259 / ガニュメート D544 / さすらいの夜の歌 I D224 /
《竖琴弾きの歌》D478 / さすらいの夜の歌 II D768 /
ミューズの息子 D764 / 遠く去った人 D765 /
流れのほとり D766 / 歓迎と別れ D767 / 月に寄す D296

1/22 (金) 19:00 第2夜—リュッケルト・アーベント
R.シューマン: 献呈(ミルテの花 Op.25より) / 松雪草(子供のための歌のアルバム
Op.79より) / 東方のぼらより(ミルテの花 Op.25より)
R.シューマン / C.シューマン: 《恋の囁》の12の詩 Op.37より
シューベルト: 巡礼 D778a / 老年の歌 D778 / 笑いと涙 D777 / それらがここにいた
ことは D775 / 君こそわが戀い D776 / 挨拶を送ろう D741
マーラー: 5つのリュッケルトの詩による歌曲より
ヘンツェ: パラダイス(6つのアラビアの歌より)

3/18 (木) 19:00 10/28発売
ピーター・ウィスペルウェイ(チェロ) & 北村朋幹(ピアノ)
ベートーヴェン: チェロ・ソナタ第1番 へ長調 Op.5-1
カバレフスキー: チェロ・ソナタ 変ロ長調 Op.71
ベートーヴェン: モーツァルト《魔笛》の主題による12の変奏曲 へ長調 Op.66
ショスタコーヴィチ: チェロ・ソナタ 二短調 Op.40

5/15 (土) 18:00
笹沼 樹(チェロ) & 兼重稔宏(ピアノ)
ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲
ベートーヴェン: チェロ・ソナタ第1番 へ長調 Op.5-1 / 第2番 ト短調 Op.5-2
第3番 イ長調 Op.69 / 第4番 八長調 Op.102-1
第5番 二長調 Op.102-2

6/21 (月) 19:00
キリル・ゲルシュタイン(ピアノ)
メンデルスゾーン: 厳格な変奏曲 二短調 Op.54
シューマン: 幻想曲 八長調 Op.17
ワーグナー/リスト: イゾルデの愛の死 S447
リスト: ピアノ・ソナタ 短調 S178

ベルチャ・クアルテット
ベートーヴェン 弦楽四重奏曲全曲演奏会

7/7 (水) 19:00 I
第3番 二長調 Op.18-3 / 第16番 へ長調 Op.135
第8番 ホ短調 Op.59-2(ラズモフスキー第2番)

7/8 (木) 19:00 II
第6番 変ロ長調 Op.18-6 / 第15番 イ短調 Op.132

7/10 (土) 18:00 III
第5番 イ長調 Op.18-5 / 第9番 八長調 Op.59-3(ラズモフスキー第3番)
第12番 変ホ長調 Op.127

7/11 (日) 18:00 IV
第4番 八短調 Op.18-4 / 第10番 変ホ長調 Op.74(ハーブ)
第7番 へ長調 Op.59-1(ラズモフスキー第1番)

7/13 (火) 19:00 V
第2番 ト長調 Op.18-2 / 第11番 へ短調 Op.95(セリオーン)
第14番 嬰八短調 Op.131

7/14 (水) 19:00 VI
第1番 へ長調 Op.18-1 / 第13番 変ロ長調 Op.130+大フーガ 変ロ長調 Op.133

8/10 (火) 19:00
クアルテット・インテグラ III
ストラヴィンスキー: 弦楽四重奏のための3つの小品
ショスタコーヴィチ: 弦楽四重奏曲第1番 八長調 Op.49
エトヴェシュ: コレスポンデンス
バルトーク: 弦楽四重奏曲第1番 Sz40

※各公演の詳細はオフィシャルWEBサイトにてご確認ください。

2026年6月中旬現在

Artist Interview

本堂 竣哉

Hondo Shunya

人生の中心にある 《ゴルトベルク変奏曲》



写真: 藤本史昭 / 取材・文: TOPPANホール

ベーゼンドルファーとの出会いは、たしか小学生の時。閉校した小学校を再活用した施設(*1)にベーゼンドルファーが置いてありました。初めて触れた時、「なんだこのピアノ！」ってすごい衝撃を受けました。以来ずっと虜になっています。だから今回お話をいただいたとき、真っ先に思い浮かんだのは、大好きなピアノで大好きな《ゴルトベルク》を弾いたら、どんなに幸せなことだろうって、もうそれだけでした。さっき少し弾かせてもらいましたが、ピアノが音楽をどんどん引き出してくれる感じがして、すごく楽しかった。きっと本番はもっといい時間を過ごせるんじゃないかと、いまからワクワクしています。

J.S.バッハは無理に感情を押し付けてこないニュートラルなところ、自分の感情と一番自然に繋がる部分に、幼少期からずっと惹かれています。



初めて《ゴルトベルク》に触れたのは、両親が持っていたCD『クラシック名曲選』。曲目リストに「ゴルトベルク変奏曲より(アリア)」と書いてあって、「より」ってどういう意味だろうと興味を持ったのがきっかけでした。(アリア)以外も聴いてみたいと思い、CDショップに探しに行ったら、たまたま手に取ったのがグレン・グールドの1955年盤でした。そのテンポの速さに驚きつつも、彼の演奏に魂と繋がるようなものを感じて、すっかりハマってしまいました。その後購入した1981年盤は逆に51分とゆっくりめで、学校のマラソン大会での脳内BGMにちょうどいい。だいたい10km 60分くらいでゴールするから、どこを繰り返してタイミングをあわせようかって(笑)。

グールドはこの2枚の録音を通して《ゴルトベルク》の完成形を突き詰めようとしていたのではないかと考えています。僕もこれからの人生の節目には自然と《ゴルトベルク》に向き合っていくことになると思っています。けれどグールド2号になっても仕方がないので、自身の現在地点で得られた自由で新たな視点を音楽に昇華できたらと思っています。

今回のコンサートでその手助けをしてくれるのが、ベーゼンドルファーです。先ほどピアノの前に座った瞬間の安心感といったら…。弾き手次第でどんな音楽でもつくれる懐の深さと、薪ストーブのようなあたたかさを感じました。日比谷のベヒシュタインで弾いた1912年製のピアノもそうですが、楽器のほうが音楽を知っているの、ピアノから新たなイマジネーションを得ることも多く、楽器と会話をしながら純粋に音楽と向き合っていきたいです。話が少し戻りますが、僕はコンプリート欲が強いので、良いと

思ったらそのすべてを知りたくなっちゃうんです。だからグールドは、《パルティータ第1番、第2番》《イギリス組曲第2番》《フランス組曲第2番、第6番》《イタリア協奏曲》と聴きまくってました。そうしたらグールドの姿を実際に感じるようにもなって、ドライブ中に車窓からみえる草原のなか、《パルティータ第1番》の《コロンテ》を弾いているのが見えたこともありまして、彼から電話がかかってくる夢を見たこともあります。彼のドキュメンタリー番組を見ては、将来ピアニストとグールド研究者になると、どっちが幸せかなんて考えたこともあったくらいです。グールドの呪縛から逃れるまでに10年以上はかかりました(笑)。

その呪縛から解放してくださったのが、小林道夫先生です。野島稔・よこすかピアノコンクールの優勝記念コンサート(*2)で《ゴルトベルク》を演奏したんですが、その前日に偶然にも同じホールで小林先生のオール・モーツァルト・コンサートがあって。「僕も明日、ここで《ゴルトベルク》を弾くんです」ってご挨拶したのが、はじめましてです。少しアドバイスをいただいて、翌日さっそく実践してみたりして。連絡先も交換したんですが、さすがに自分からは連絡できなくて、でもある日、「小林道夫です。今度東京に出る用事があるので、食事でもどうですか?」って電話をくださって。そこからレッスン含め交流が始まり、楽譜の読み方や音楽の組み立て方など、いろんなことを学ばせていただいています。そういえば、先生のお宅にも古いベーゼンドルファーがあって、それもすごく好きな楽器のひとつですね。

* * *

これまでの《ゴルトベルク》のコンサートでは80分通して演奏してきましたが、今回は15曲ずつで休憩を挟もうと考えています。J.S.バッハだからといって気を張らずに、彼が創り出した完成されたひとつの宇宙をありのまま、お客さまと享受できたら嬉しいですね。《ゴルトベルク》はものすごく数学的に構成されているんですが、そういう解説的なことは僕に任せて、ただ純粋に音楽から栄養をもらって人生の糧にさせていただいたら。良いコンサートになるよう頑張ります!

(2026年5月)

*1: あけぼのアート&コミュニティーセンター(札幌市)
*2: 2022年9月5日@ふきのとうホール(札幌市)

本堂 竣哉(ピアノ) × ベーゼンドルファー Model 250

2026年7月23日(木) 19:00
J.S.バッハ: ゴルトベルク変奏曲 BWV988
5,000円 / U-25 2,500円 全席指定
特別協賛: 高砂熱学工業株式会社

【使用楽器について】
1933年まで製造されていた92鍵タイプで、通常のモダンピアノより4鍵盤拡張されている。より深い倍音と、独特かつ重厚な響きを特徴とし、製造されてから約116年経った今もなお、ベーゼンドルファーならではのあたたかな「ウィンナー・トーン」を伝え続ける、貴重なピアノである。ベーゼンドルファー・ジャパン(株)ヤマハミュージックジャパン)所有。

日時	公演
6 (月) 19:00	(ハーゲン プロジェクト フィナーレ) ハーゲン・クアルテット
7 / 7 (火) 19:00	
23 (木) 19:00	本堂竣哉(ピアノ)×ペーゼンドルファー Model 250 特別協賛：高砂熱学工業株式会社
1 (木) 19:00	TOPPANホール26周年 2026/27シーズン オープニングコンサート ウィリアム・ヨン(ピアノ)/毛利文香(ヴァイオリン)/笹沼 樹(チェロ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
10 / 5 (月) 19:00	ルノー・カブソン(ヴァイオリン) & ギヨーム・ペロン(ピアノ) ブラームス《ヴァイオリン・ソナタ》全曲 特別協賛：鹿島建設株式会社
26 (月) 19:00	パトリツィア・コバチンスカヤ(ヴァイオリン) & ソル・ガベッタ(チェロ) 特別協賛：東急建設株式会社
11 / 16 (月) 18:30	Glocal Piano Festival at TOPPANホール 第66回 プゾーニ国際ピアノコンクール 予選会 共催：フェルッチョ・プゾーニ・グスタフ・マーラー財団
17 (火) 18:30	

日時	公演
12 / 8 (火) 19:00	フォーレ四重奏団
9 (水) 19:00	特別協賛：株式会社 竹中工務店
〈ランチタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]	
7 / 27 (月) 12:15	Vol.140 近衛剛大(ヴィオラ) ヴィオラの大型、無伴奏に挑む
8 / 8 (土) 12:15	Vol.141 稲積陽菜(ピアノ) まだ見ぬ、彼方の光へ

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2026年6月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

世界最終公演! ハーゲン・クアルテット——音楽は受け継がれ、歴史が編まれる

私の手許におそらく未だCD化されていない1983年のロッケンハウス音楽祭の4枚組のLP(Orfeo)がある。それが、おそらく私がハーゲン・クアルテット(以下、ハーゲンQ)を強く意識した最初だったように思う。添付された写真を見返すとみなさん実に若い。同じLPには、クレームル、ツェートマイヤー、マイスキーらに交じってブラームスの弦楽六重奏を弾くヴェロニカの記録も残されていた。モーツァルトを産んだザルツブルクのサラブレッド達は、デビュー当時、オーストリアの、いやヨーロッパの寵児だった。なにも巧まらずに自然に弾いて、それがサラッときれいな音楽に仕上がる。まるで梨園の御曹司達のような気品のある清々しい音楽は、いまだ芸術界に深くナチスの爪痕を残すヨーロッパ楽壇に新風のように響き輝いたに違いない。しかし、かけがえのないみずみずしさとナイヴさは、裏を返せば頼りなさや脆さにもつながる。新世代の台頭を感じながらも、彼らがどのように変化していくのかが懸念なくなくなった私は、その後も機会あるごとに日本でヨーロッパで、彼らの実演を聴き続けた。

2001年春、私は新たな仕事場となるTOPPANホールの空間や音響をイメージしながら、約ひと月、ウィーンを中心にヨーロッパに滞在し、いろいろなアーティストを聴き、TOPPANホールへの出演を要請した。カルミニョーラやJ.フィッシャーらに交じってその中心にハーゲンQがいた。1週間の間にウィーンとアイゼンシュタットでまったく異なる3公演を聴かせた彼らに「ベートーヴェン後期全曲」を弾いて欲しいと要請した。その頃には、ナイヴさはそのままに現代性も加味しながら逞しく輝く、新世代を牽引するクアルテットの姿があった。



ベートーヴェンの全曲演奏会をやってほしいと提案した時の反応もいまだ忘れられない。「全曲演奏会? これまで一度も考えたことも話し合ったこともないよ。少し時間をくれる? みんなでじっくり考え、相談してみたい」と、真摯な表情で答えてくれた。ツィクルス実現までの間にアルバン・ベルクQの解散も重なり、そこから彼らを世界のトップランナーに引き上げることに成功した1年超のワールドワイドの全曲演奏ツアーが展開されたことは、みなさまもご承知のとおり。

これは他のアーティストでもよくあることだが、使用楽器についての意見や相談も何度か受けたことも、いまとなるとは懐かしい。おそらくリハーサルを隔から隔まで聴いて付き合っている人なんて他にいないからであろう。先日も食事をしている時に様々なリハーサルの手法についての話になり、「ぼくらの演奏の成立現場やその秘密を知る4人

以外の唯一の人だよ」と言う話で盛り上がった。昨春ウィーンで、クレメンスから「世界最終公演をTOPPANホールで行うというのはぼくらのたつての希望だからね」と告げられた時は本当にびっくりした。おかげでベステイエに続いてハーゲンQもTOPPANホールでその活動を終えることになった。408席の極東の小さなホールではあるが、世界の超一流がここを最後の地として認めてくれている。少しは日本の楽壇にも貢献できたのかもしれない。

引退を発表して臨む最終のシーズン、ややもすると、それまでの総括や傷の少ない完成度の高い表現をめざしがちな気がするが、昨年11月のTOPPANホールで、彼らはそれとは対極の姿勢で臨んだ。弦楽四重奏の表現の可能性をいまだ追求する、まだ見ぬ境地への希求を強く感じさせる攻めた意欲あふれる表現がひととき印象的

だった。卓越した技巧を駆使し、アンサンブルの精緻さを誇る若手弦楽四重奏団が続々と出現、台頭してくる時代だからこそ、ハーゲン・クアルテットには、まだまだ活動を続け、音楽のおもしろさ、奥深さを追求するさまを示し続けて欲しいと思ったのは、おそらく私だけではないだろう。しかし彼らは停滞や後退を嫌い、頂点で静かに幕を降ろす決断を下した。その潔さもとても彼らしく合点がいく。

最終公演でのユリア・ハーゲンとの共演はハーゲンQの出自を思い起こさせる企画となるが、未来を託す若手として抜擢したのが、我が谷昂登というのはとてもうれしい。ハーゲンQの音楽が最後に響く7月7日のTOPPANホールで、谷がまた大きく脱皮することだろう。音楽は受け継がれ、歴史が編まれる。ハーゲン・クアルテット本当にありがとう!

(西巻正史/プログラミング・ディレクター)

〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉
ハーゲン・クアルテット **完売**

2026年7月6日(月)19:00 第4夜
ユリア・ハーゲン(チェロ)
モーツァルト:弦楽四重奏曲第21番 二長調 K575
《プロシア王第1番》
シューベルト:弦楽五重奏曲 八長調 D956

2026年7月7日(火)19:00 第5夜
谷 昂登(ピアノ)
シューマン:ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44
シューマン:弦楽四重奏曲第3番 イ長調 Op.41-3
シューベルト:弦楽四重奏曲第13番 イ短調 D804
《ロザムンデ》

気鋭ピアニスト、真夏の挑戦!



TOPPANホールが注目する若き逸材の真剣勝負をお届けしている〈ランチタイムコンサート〉。8月は、聡明で鋭敏な感性を備えたピアニスト、稲積陽菜が登場します。

これまでショパンやラヴェルの作品を得意とし、作品の個性を的確に捉えながら、その美しさを自然体で描き出す演奏で聴衆を魅了し多くの支持を集めてきました。しかし今回の〈ランチタイムコンサート〉では、あえて音楽の奥深くへと踏み込み、内面から汲み上げなければ形にならない作品に果敢に挑みます。プログラムには、彼女のレパートリーであるショパンやベートーヴェンのみならず、リストやワーグナーという骨太な作品が並びます。音楽

と真摯に向き合うことで、これまでとは異なる解釈や新たな世界が立ち上がることでしよう。

稲積陽菜が、ひとりの音楽家として切り拓く新たな境地がどのようなものになるのか—どうぞ会場でお確かめください。

〈ランチタイムコンサート Vol.141〉

稲積陽菜(ピアノ)
まだ見ぬ、彼方の光へ

2026年8月8日(土)12:15
ショパン:前奏曲 嬰ハ短調 Op.45
ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第28番 イ長調 Op.101
リスト:バラード第2番 ロ短調 S171
ワーグナー/リスト:イゾルデの愛の死 S447
1,500円 全席指定

【TOPPANホールクラブ】
無料
(ゴールド会員2枚/レギュラー会員1枚)
※電話・窓口にてお申し込みください。

深化するアンサンブルで問う、“美のあり方”

2018年に結成されたゼフィルス・ピアノ五重奏団は、日本とドイツを拠点に活躍する5人が、それぞれの感性を磨き続け、彩り豊かに作品を奏でる音楽家の集合体として、着実にそのキャリアを重ねています。

年に一度集まって創り上げる演奏会の大きな魅力の一つは、5人のこだわりが詰まったプログラム。今回、《静と烈》をテーマに「19世紀から20世紀の“美のあり方”を問いかけたい」と彼らを選んだ、シューベ

ルト、シェーンベルク、そしてブラームス—挑戦を続けるゼフィルスらしい選曲で、「対話」をじっくりと聴かせる作品が揃いました。

若手と言われた時代から時を経て、様々な経験を重ねてきた彼らは、いまその響きの質の変化を楽しんでいるのだそう。気心の知れた仲間との自由なアンサンブル、そして今のゼフィルスだからこそ生み出すことができる唯一無二の響きをご堪能ください。



ゼフィルス・ピアノ五重奏団
第7回定期演奏会 ～静と烈～

2026年8月21日(金)19:00
山田麻実、湯本亜美(ヴァイオリン)/尾池亜美(ヴィオラ)
森山涼介(チェロ)/兼重稔宏(ピアノ)
シューベルト:ノットゥルノ 変ホ長調 D897
シェーンベルク(ウェーベルン編):室内交響曲第1番 ホ長調 Op.9
ブラームス:ピアノ五重奏曲 へ短調 Op.34

全席指定:4,000円/学生1,000円
主催・お問い合わせ:ゼフィルス・ピアノ五重奏団 050-6864-4752

チケットのお申し込み:TOPPANホールチケットセンター

表紙:ハーゲン・クアルテット

紙上最多の5回目の表紙登場。高い集力と熱量で繰り出す史上空前のアンサンブルに熱狂した昨年11月の公演から、メンバーそれぞれの豊かな表情を捉えた一枚をコラージュしました。クアルテットとしての集大成を感じさせる、世界No.1の貫禄あるパフォーマンスは胸アツでした。正真正正4人でのラストステージは七夕の夜。綺麗な星のごとく響く音楽に浸る特別な一夜に—Eternal Hagen!

編集後記

何かを夢中で好きになると、人生が何倍もワクワクしたものになります。推し活という言葉が今やすっかり市民権を得て定着しているのも、その証。「推しは尊い」、とはまさに言い得て妙。今回インタビューさせていただいた本堂竣哉さんは、音楽やピアノはもちろん、

その他多方面に「推している」モノやコトがあり、その心から楽しそうなお話しぶりに、私たちもすっかり「Shunya推し」になってしまいました。みなさんもぜひ、魅力あふれるアーティストが粒ぞろいのTOPPANホールで推し活、してみませんか? (ゆ)